

晩夏の日本海紀行

高橋 祐吉

はじめに

今年の夏は炎暑、酷暑の日々が続いた。そんな夏もようやく峠を越したかと感じられるようになった9月の初旬に、秋田、山形、新潟と廻ってきた。9月に入ったのだから、タイトルは「初秋の日本海紀行」でもいいかと思ったが、暑かった夏の記憶が余りにも鮮烈だったもので、あえて「晩夏の日本海紀行」としてみた。専修大学とは、定年退職を機にすっかり縁を切ってしまった形の私だが、唯一残しておいた繋がりがある。社会科学研究所の参与という肩書きである。これもなくてもいいかと一時思ったこともあったが、間際になって考え直した。この肩書きがあると、研究所が企画、実施する調査旅行に、所員と同じような資格で参加させてもらうことができるからである。興味深い調査旅行に出掛けることによって、何か書けるかもしれないといった「下心」を抱いている私にとっては、やはり大事な肩書きだということになる(笑)。

今回の調査旅行のテーマは、「北前船の足跡をたどる Part2—東北日本海側：秋田～新潟—」となっており、Part2と記されていることからわかるように、既にPart1が実施されている。昨年のほぼ同時期に行われた「北前船の起点をめぐる—北前船 Part1—」と題する調査旅行である。私は、小樽や江差、函館を巡ったこの調査旅行にも興味を抱いたが、当時はまだ現職であったために、ゼミナールの合宿と重なってしまって、残念ながら参加することができなかった。仕方がないので、月報の特集号 (No.654・655) を斜めに読んで、その雰囲気のみを味わった次第である。

そこで今回の Part2 である。定年後とあって、都合などどうにでもなる身となったので、出掛けるのが待ち遠しかった。近くに住む訳知りの知人に今回の調査旅行の話をしたら、「酒も旨いし、料理も美味しいし、美人も多い」などと言って羨ましがられた。今更美人に特段の関心があるわけではないが (これは本心である一笑)、件の彼が言うには、秋田美人、庄内美人、それに越後美人なのだそうである。出掛ける前から、何だか天国にでも向かうかのような気分であった(笑)。天国が近づいて来た年寄りが出掛ける場所としては、うってつけのところなのかもしれない。

私の個人的な目的は、北前船の寄港地の跡やそれにまつわる資料館などを訪ねて、エッセー風の雑文を書くための材料を集めるところにあつたが、調査旅行ではそうした歴史に関わる探索だけに留まらず、三県に立地された先端工場や酒蔵、ワイナリー、米菓工場などにも顔を出

した。それらの訪問先に関しては、同行の諸氏が詳しく紹介してくれるはずである。現代日本の産業や企業の動向について言えば、私などはまったくの素人である。初めて見るようなところを見学している分には十分に面白かったのだが、わざわざ文章にしてみたいと思うことは特にはない。以下では、自分の書きたいことを書きたいように、気儘に綴ってみることにしたい。こうした振る舞いを傍迷惑というのであろうが、傍迷惑を考えないのが年寄りの長所でもあり、また短所でもある（笑）。

第一部 秋田・土崎湊にて

出発の日となった9月3日は、東京はあいにくの小雨そぼ降る天気だった。まずは秋田市に向かったのであるが、私は秋田新幹線が、盛岡を経由し奥羽山脈を横断し、大仙市で大きくカーブして秋田市に至ることさえよく知らなかった。山形から秋田に向かっているのだろうと勝手に思い込んでいたからである（笑）。同じ東北の福島出身者にしては、うかつと言えば余りいうかつである。途中仙台を過ぎたあたりから、少しずつ晴れ間も見え始め、盛岡から秋田に向かう頃には、秋めいた景色が車窓から眺められるようになった。黄色に色付いた一面の稲穂が美しく、もう暫くすれば稲刈りが始まるのだろうと思われた。何とも爽やかな秋の気配があたりを漂っており、田舎育ちの私は、調査に来たことなどすっかり忘れてしばし郷愁に耽った（笑）。私が秋田県内に足を踏み入れるのは、今回が二度目である。最初に来たのは、盛岡にある岩手大学で社会政策学会が開かれた時である。折角盛岡まで来たのだからと角館にまで足を延ばし、武家屋敷跡などを一人でぶらりと散策した。今から10年程前の懐かしい思い出である。

秋田市に到着後、すぐに市役所を訪問して市の関係者からの聴き取りが行われた。その後の質疑応答では、さまざまなことが話題となったが、私がとりわけ注目したのはその際の平尾さんの発言であった。市の職員の方が、「県内には名の知られたところが結構あるが、秋田市には竿燈祭りを除くと見るべきものがないので、売り出し方に悩んでいる」といった趣旨の発言をされたのに対して、平尾さんは「芸術の分野で秋田を売り込んでどうか」と述べられたのである。思わぬ提案だったので気になったのである。そのうえで、平尾さんは木村伊兵衛、藤田嗣治、足立源一郎（あるいは猪熊弦一郎だったか）の名前を挙げられた。三人目の画家については、どちらにしても名前だけしか知らないのに、何も書くことはないのだが、木村伊兵衛と藤田嗣治については、この機会に少しばかり触れてみたくなった。

木村伊兵衛と「秋田民俗」のこと

まずは木村伊兵衛である。彼は、「和製ブレッソン」とも評され、彼の名を冠した木村伊兵衛賞は、写真家の登竜門とも言われている。彼は土門拳と並んで、日本の写真家を代表する双璧とも言うべき存在である。私の手元にはたまたま全4巻からなる『木村伊兵衛写真全集昭和時代』があるが、その4巻目は「秋田民俗」と題されている。そこに付された、農村問題に関する評論活動や「たいまつ」でも知られる秋田生まれのむのたけじや、写真家の菌部澄（そのベ・きよし）の解説を読むと、東京生まれの木村と秋田を結び付けるような接点は何もなかったようだから、その繋がりはいままでの偶然の産物だったことになる。

1952年に写真コンテストの審査員としてたまたま秋田に出向いた木村は、この最初の秋田行で、報道写真家としての自分を取り戻さなければならぬと強く感じたい。その思いがどれほど強かったかは、その後1971年までの20年間に、秋田での撮影行が21回にも及んだことから窺われよう。相当な入れ込みようである。秋田で撮影された木村の一枚と言うことになれば、かなりの人が知っているであろう田植え姿のおばこ（秋田弁で若い娘のこと）の写真なのではあるまいか。この写真は1953年（この年には、木村は三度も秋田に出掛けている）に大曲で撮られている。秋田美人とはこういう人のことを言うのであろうか。

モデルとなったのは、当時19歳の柴田洋子という女性だそうだが、彼女はもう既に亡くなっている。木村は他にも彼女の写真を撮ったようだが、美女にありがちなモデル臭さを嫌って、田植え姿にして田圃に立たせたい。たんに美しい女性を撮っただけの写真であったならば、しばらくすれば忘れ去られたような気もしないではないが、田植え姿すなわち農で働く姿であったが故に、彼女の美しさは匂い立つほどに際立ったのではなからうか。素人が偉そうに言うわけではないのだが、さすが木村である（十分に偉そうな物言いではある一笑）。

この写真を印刷した大きな垂れ幕が、我々一行を出迎えるかのように（たんなる気のせいである一笑）、市内のデパートや道の駅などに掛けられていた。現在の秋田を売り出すのに、優に60年以上も昔の木村の写真が今でも使われているのである。代表作の代表作たる所以であろう。私自身も少々驚くとともに何だか懐かしさも感じた。ところでこの垂れ幕だが、写真の左隣には「あきたびじん」と大きな字で書かれていた。しかしながらよく見ると、「じ」と「ん」の間にきわめて小さな字で「よ」が入っているではないか。秋田の人も結構笑えるなあと、一人にやつてしまった（笑）。妙なところで秋田に親近感を抱いたというわけである。

話が脇道にそれたが、平尾さんは、秋田に入れ込んだ木村を顕彰するような記念館などがあってもいいのではないかと、言いたかったのであろう。ネットで検索する限り、木村の記念館は全国どこにも見当たらない。隣の山形には、酒田市生まれではあるが、山形を撮った写真など

まったくなかった土門拳を顕彰して、じつに立派な記念館が建てられている。余りにも対照的な二人である（笑）。今まったくなかったと書いたが、これも私の手元にある『土門拳全集』全13巻を見る限りではと言うことなのだが…。余談のついでだが、私が木村の写真で気に入っているのは、浅草あたりで若い修行僧がストリップ小屋の看板にチラリと眼をやりながら通り過ぎていくその姿を、後から撮ったものである。「聖」と「俗」が入り交じった一瞬を切り取ったその表現が、何ともユニークである（笑）。対象を徹底して凝視する土門も好きなのだが、木村の一瞬の鋭い感性も捨てがたい。

藤田嗣治と平野政吉のこと

では、平尾さんが挙げたもう一人の人物、藤田嗣治についてはどうだろうか。藤田の画業についてはよく知られているので、ここでいちいち触れる必要はあるまい。藤田と秋田との繋がりですぐに思い出すのは、大作「秋田の行事」であろう。縦3.7メートル、横20.5メートルにも及ぶ大壁画（制作は1937年）であり、それが秋田県立美術館に展示されていることはよく知られている。美術館のシンボルともいうべき作品である。この大壁画が出来上がったのは、藤田のパトロンでもあり藤田作品のコレクターでもあった平野政吉の依頼があったからである。当時平野は藤田美術館建設の構想を抱いており、その壁面を飾る作品の制作を藤田に要請したのである。

では、その平野とはいったいどんな人物だったのだろうか。彼は、秋田市の商人町で江戸時代から続く米問屋を営んでいた平野家の三代目であり、その平野家は県内有数の資産家でもあったという。平野は、若い頃から浮世絵や骨董、江戸期の絵画などに興味を持ち、生涯を通じて美術品を蒐集し続けた人物である。秋田には、江戸時代に秋田蘭画と呼ばれる一派が存在したが、その影響などもあったのかもしれない。お金については、文字通り糸目を付けない注ぎ込み方だったようである。「秋田の行事」の制作に際しては、その報酬として藤田に当時の金額で50万円（家100軒分にもあたるような金額である）を支払ったというし、美術品の収集のために月に米俵200俵分も注ぎ込んだと言われている。

平野政吉が初めて藤田嗣治の作品に出会ったのは、1929年に藤田がフランスから一時帰国した際に開かれた個展においてである。その後、1934年に二科展の会場で初めて藤田本人に会い、藤田の人柄と作品に魅了されて藤田作品のコレクターとなり、更には藤田美術館の建設まで構想するようになる。しかしながら、戦時下であったために美術館の建設は挫折を余儀なくされたと言う。

当初の構想から30年も経った1967年に至って、平野は長年収集した美術品を公開するため

に、ついに平野政吉美術館を設立することになる。さらに、同年には平野コレクションを展観できる秋田県立美術館が開館し、現在に至っている。こんなふうに見てくると、平野が蒐集した藤田嗣治の作品を始めとしたさまざまな美術品は、秋田の宝だと言っても言い過ぎではなかろう。これも余談になるが、私が好きな藤田の作品は、個人的な因縁もあって、周りに猫を配した乳白色の裸婦像である。よく知られた作品である。いささか妖艶な感じが漂っているが、それだからこそ清楚さをも備えた裸婦の美しさが眩しく見えるのかもしれない。

では平野が美術品の蒐集に費消した膨大な資産は、いったいどこから生まれてきたのであろうか。米問屋が米を一手に扱うことによってである。雄物川流域やその支流域に広がる穀倉地帯で収穫された秋田各地の米が、雄物川の河口に位置する土崎湊に集められ、そこから北前船によって大阪にまで運ばれていたのである。前田貞仁の『北前船寄港地ガイド』（無明舎出版、2018年）によると、河村瑞賢によって西廻り航路が開拓されて以降、秋田藩が大阪に運んだ米は毎年10万石にも及んだと書かれている。藩はこのため、米倉庫である「御蔵」を建てたのであるが、その場所には、今も「土崎港御蔵町」という地名が残っている。米問屋であった平野の家も、こうした時代背景のもとで繁栄を続けたのだらうと思われる。

西廻り航路による日本海海運の発展にもなあって、領内と領外の結節点に位置した土崎からは、大量の米が運び出されただけではなく、そこには、諸国の産物を積んだ廻船も数多く入港した。こうした産物は、土崎だけではなく、雄物川流域の人々にも捌かれていった。19世紀の初頭には、入港する廻船が年間600艘を超えたというし、藩が廻船から得ることのできた税も年に15,000両もあったというから、秋田藩にとって、藩港であった土崎はまさに「金をうむ港」だったことになる。北前船と取引する廻船問屋や船乗りたちが泊まる船宿、倉庫などが建ち並び、更には長旅の船乗りたちが遊ぶ遊郭もできて、土崎湊はまさに藩領第一の湊として大繁盛したのである。

因みに、ここまで土崎湊と書いてきたが、港と湊はどう区別されるのであろうか。筆者は、湊は港の古風な表現のように思っていただけだったが、調べてみると、「港」は船舶が停泊するのに適したところであり、「湊」は水辺の地で人が多く集まるところを言うところである。「みなと」の水側の部分が「港」であり、「みなと」の陸（おか）の部分が「湊」だということである。「みなと」が繁栄したことを言いたいのであれば、「湊」を使用する方がより適切だということになろう。そんなわけで、土崎を土崎湊（さらには酒田を酒田湊、新潟を新潟湊）と表記することにしたのである。

ところで、それだけの繁栄を遂げた地であれば、歴史的な遺産があちこちに数多く残されていてもおかしくはない。しかしながら、この土崎近辺は、アジア・太平洋戦争最末期の8月14日から15日にかけて、米軍による最後の空襲を受けて焼け野原となり（近くにあった製油所の

破壊を目的とした大規模な空襲で、死者は250名を超えた)、それによって、土崎の繁栄を偲ぶことのできる多くの歴史的な遺産は焼失した。われわれが訪ねた「土崎みなと歴史伝承館」(ここには、土崎空襲で罹災した旧日本石油秋田製油所の柱と梁が移築され、焼け爛れた建物の内部が再現されている)の展示が予想していたよりもいささか貧弱に思えたのは、きっとその所為なのであろう。われわれは、港の側に建つセリオタワーにも登ったが、そこからは歴史の面影が失われた港と市街地が一望されただけだった。

まったくの余談ではあるが、食べ物の話に関しても一言触れておきたい。秋田では「かまくら」作りの居酒屋で結団式があり、きりたんぼなどを食べた。ただでさえ話が弾んでいるところに、突然「なまはげ」が闖入してきたこともあって、座は大いに盛り上がった。そのためなのか、きりたんぼ以外に何を食したのかがどうにも思い出せない(笑)。食べ物に淡泊な所為もあるのかもしれない。私などは、「なまはげ」と聞いて自分のことかと思ったりもしたが、「なまはげ」は「生剥げ」と書くのであって、「生禿げ」ではない。もじゃもじゃの毛を付けて「禿げ」はなからう(笑)。

雑誌『種蒔く人』のこと

ところで、この土崎という地では、1921年に文化・文芸誌である『種蒔く人』が創刊されている。『種蒔く人』は高校の教科書にも登場しているぐらいだから、多くの人がその名を知っていることだろうが、秋田の土崎と関係があることについては、余り知られてはいないかもしれない。土崎で生まれ、若くしてフランスに留学した小牧近江が、彼の地で「クラルテ運動」と呼ばれた反戦運動に共鳴し、その種を日本に蒔こうと、同じ土崎生まれであった友人の金子洋文(かねこ・ようぶん)や今野賢三(いまの・けんぞう)らとともに、『種蒔く人』を発刊したのである。小牧が若干27歳の時である。創刊号から第3号までは土崎で印刷されており(これは土崎版と呼ばれている)、一時休刊した後、土崎出身者以外のメンバーも加わって1922年に東京で再刊されている。

当時近江らは東京におり、土崎では雑誌の印刷が行われたただけであったが、この雑誌で初めて、「第三インターナショナル」(1919年にレーニンらの指導の下にモスクワで創設された国際共産主義運動の指導組織)の存在が紹介され、世に知られることになった。彼らが、プロレタリア文学運動にとって先駆的な役割を果たし得たのも、出身地である土崎の経済的な繁栄や、そこで育まれたであろうと想像される幅の広い視野や進取の気性、現実社会への鋭敏な関心などと無関係ではなからう。余談ではあるが、小牧はフランス留学中に藤田嗣治と交流があったとのことである。北条常久の『種蒔く人 小牧近江の青春』(筑摩書房、1995年)には、当時

の藤田のいささか（いやかなりか一笑）破天荒な生活ぶりが紹介されており、なかなか興味深いものがあった。土崎がもたらした歴史の奇縁なのであろう。

『プロレタリア文学全集』全40巻（新日本出版社、1988年）の別巻には、「プロレタリア文学資料集・年表」が整理されており、そこには、東京で再刊された『種蒔く人』の宣言文も掲載されている。格調高い文章なのでそのまま紹介しておこう。「嘗て人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものの運命は知るべきである。／現代に神はいない。しかも（しかりの誤りか？）神の変形はいたるところに充満する。殺すものは僕たちである。是認するのは敵である。二つの陣営が相対するこの状態の続く限り人間は人間の敵である。この間に妥協の道はない。然りか否かである。真理か否かである。／真理は絶対的である。故に僕たちは他人のいわない真理をいう。人間は人間に対して狼である。国土と人種とはその問うところではない。真理の光の下に、結合と分離とが生ずる。／見よ。僕たちは現代の真理のために戦う。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために革命の真理を擁護する。種蒔く人はここに於いて起つ—世界の同志と共に！」

秋田での調査を終えた我々は、本庄市やにかほ市を抜けて山形に入り、次の目的地である酒田に向かった。県境には鳥海山が聳えており、秋田でもあちこちからこの山が遠望できた。山頂は山形に位置しており、県の最高峰であるとのことだが、鳥海山は秋田の人々にとってものなじみの深い山であろう。この鳥海山を長年にわたって撮り続けてきたのが写真家の青野恭典であり、作品は『四季鳥海山』として纏められている。山も写真もやらないくせに（あるいはやらないからなのか）、山の写真集を眺めるのは好きなのである（笑）。初めて見る鳥海山だったが、秋田富士とも呼ばれているとのことで、何やら懐かしい感じがした。故郷福島の吾妻小富士を思い出したからなのかもしれない。

第二部 山形・酒田湊にて

山形は私の育った福島県の隣県なので、少しは知っているとは言うものの、私にとっての山形は、せいぜいが米沢市や山形市止まりで、その先は勿論、酒田や鶴岡（ここには藤沢周平記念館がある）のような日本海沿いの山形については何も知らない。幼き日に父に連れられて山寺に出掛けたことや、中学・高校時代の友人が山形大学に進学したので、その頃山形を訪ねたこと、さらには福島での温泉巡りの帰途に米沢に顔を出したことなどが思い出される。数年前には、米沢駅で山形新幹線の上りと下りを間違えて乗ってしまい（笑）、隣の駅で慌てて降りたのはいいが駅前には文字通り何も無いという田舎の駅で、やむなく葡萄を口にしながら待合室で無聊を慰めたこともある。今でも一人苦笑いを禁じ得ない思い出である。

『おくのほそ道』と最上川のこと

山寺で思い出されるのは、急峻な岩山の上に建つ立石寺である。ここは、芭蕉が『おくのほそ道』で「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の句を詠んだところとして、よく知られている。芭蕉は、この山寺に立ち寄った後大石田（尾花沢市の近くにある大石田町）に出る。『おくのほそ道』には、「最上川乗らんと、大石田といふ所に日和を待つ。（中略）最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。基点、隼などという恐ろしき難所あり。板敷山の北を流れて果ては酒田の海に入る」と記されている。

山形と言えば最上川であり、この時に最上川を詠んだ句も有名である。「五月雨を集めて早し最上川」である。最上川はわが国三大急流の一つということのようだから、きっと今でも急な流れなのであろう。芭蕉は河口となる酒田でも最上川を詠んでいる。こちらは「暑き日を海に入れたり最上川」である。いかにも大河の趣が感じられる句である。どちらの句もその情景が目に浮かぶようである。酒田に至る途中出羽三山の一つである月山を見て、「雲の峰いくつ崩れて月の山」という句も詠んでいるが、これもなかなか雄大である。

最上川流域もまた、米沢盆地、山形盆地、新庄盆地、庄内平野を抱えたわが国屈指の米どころであり、稲を積んで川を下る舟を稲舟（いなふね）と呼んだ。いかにも最上川にふさわしい美しい言葉である。古今和歌集には、「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」という歌が採録されている。「いなにはあらず」と言わんがために、「稲舟の」までを連ねているのである。いやじゃないんですよと言うこの言い回しを、山本健吉はまんざらではない媚態のように解説していたが、素人の私には、男に「いなにはあらず」と断定的に返しているところに、如何にも直裁で健康な恋の歌のようにも響くのである。明治時代の女流作家田沢稲舟は鶴岡の出身であるが、彼女の名がこの歌から取られていることは言うまでもなからう。

バスが酒田に到着するまでは結構時間がかかったはずなのだが、途中のことは何も覚えていない。同行の方々とあれこれお喋りをしていたからである（笑）。開放的な気分がいつもの抑制を緩ませるのであろう。山居倉庫（この倉庫は、米どころ庄内のシンボルともなっている）の側にあるホテルに到着後、何人かで飲みに出掛けようということになったが、近くの小料理屋は予約で一杯であったり、倉庫内のレストランも台風の接近に備えて早々と店じまいしたこともあって、やむなくホテル内での夕食となった。山居倉庫の直ぐ近くに架かったなかなか立派な新内橋を渡って、町中まで出掛けた元気な人もいたようだが、もしも風雨が強まると帰りが大変になるかもしれないと思って、年寄りの私は自重することにした。調査旅行に連れてきてもらって、周りに迷惑は掛けられない。

心配された台風であったが、夜中にかなり激しい風雨をもたらしたものの、翌日には通り過

ぎてしまい、一転して朝から汗ばむほどの陽気となった。こうなると、昨晚行けなかった倉庫内のレストランでの食事が気になり、その日の夜に年配のグループ7~8人で再度出掛けた。歴史を感じさせる古い倉庫を生かしたお酒落な作り、美味しい魚と肉にしてはリーズナブルな値段、それにあれこれのお酒を飲み比べることもできて、満足してホテルに戻った。気心の知れた人たちとの遠慮のいらぬ楽しい会話が、座を盛り上げるスパイスとなったことは間違いなからう。

美味しかったのは酒が入った夕食ではなかった。この日は、後に触れる酒田市資料館と旧鑑屋を訪問後、昼にトンカツを食べることになっていた。私が老いを感じるようになったのは、頭が禿げてきたことももちろんあるが、それ以上に昼にカツ丼を食べる意欲が失せたこともあった(笑)。よく出掛けた大学の近くにある蕎麦屋にはカツ丼もあったが、昼にはそれが胃に重く感じられるようになったからである。そんなわけで、食べられるのかどうか心配しながら箸を付けたのだが、これが文句なく旨かった。苦もなく平らげてしまった(笑)。件の平尾さんは、平田牧場の豚肉についても詳しく、あれこれと解説してくれた。有名な豚肉らしいが、私はそうしたところにはまるで無頓着な方なので、山形に来て初めて口にしたというわけである。

酒田市資料館にて

こんな話を続けていると食紀行になりそうな気配だし、そうすると宮寄所長に迷惑をかけそうな気がする(笑)、話を本題に戻そう。われわれが山形に来てまず最初に訪ねたのは、酒田市資料館である。1階には1976年の酒田の大火に関する展示があり、2階では酒田の古代から近代までの歴史を通覧できるようになっている。元々酒田市周辺は、日本海から内陸部への風の通り道となっており、酒田は「風の街」と言われたりもする。1976年10月29日のこの日も風が強くて、大火災となったのだという。

その酒田は、最上川の河口に位置していたために、江戸時代には西廻り航路の拠点の港として発展した。北前船の寄港地は各地でそれぞれ賑わいを見せたが、酒田のそれは格別で、「西の堺、東の酒田」と言われたほどだった。西廻り航路に加えて、最上川の舟運が繁栄をもたらし、日本海有数の港湾都市に発展したのである。諸国往還津(津とは港のこと)と称された所以である。米を運ぶ弁財船の帆柱が港に林立し、豪商たちが本町通りに居を構えた。この辺りの展開は、雄物川河口の土崎とよく似ている。ただ、酒田の歴史はかなり古く、すでに戦国時代には三十六人衆が合議によって町を支配する仕組みが出来上がっていたようであるから、その頃から自治都市的な性格を有していたのであろう。この辺りは堺とよく似ている。こうした合議

制は江戸時代を通じて続くことになるが、この「大豪商集団」はすべて廻船問屋だったという。

酒田では、あれこれの関連資料を入手できたが、中でもなかなか面白かったのはジュニア版の『酒田の歴史（改訂版）』（酒田市教育委員会、2015年）である。私などは酒田に関してはジュニアみたいなものだから、ちょうど手頃だということか（笑）。読み物としてもよくできているだけではなく、図版や資料がたくさん掲載されており、眺めているだけでも楽しい。あとがきによれば、初版は「1992年酒田開港500年記念の年に、中学生の皆さんに『すてきな贈り物』として、市長さんや教育委員会のはからいで作られました」とある。「すてきな贈り物」と書くセンスがなかなか素敵である。

それによると、「北前船とは、江戸時代中頃から明治中期まで蝦夷地（北海道）と上方（大阪）との間の商品流通に活躍した船のことである。多いのは北陸地方の船で、春に日用品を大阪で積み込み、航路沿いの各地の湊や酒田湊に寄って積荷を販売したり、寄港地の産物を買入れて蝦夷地に向かった。蝦夷地では特産の海産物を買込み、航路沿いの湊に寄港しては積荷の販売や産物を買込んで大阪に帰るといふ、動くスーパーマーケットのような船で、蝦夷地と大阪だけでなく、それ以外の航路でも活躍していた。使用された船は日本海の荒波にも耐える弁財船（弁才船）であった。／その頃酒田では北前船と呼ばないですべて『大船』（おおふね）といっていた」と記されている。

北前船の時代に、その船を北前船と呼んでいたのは大阪や瀬戸内だけで、東北地方では弁財船の呼び名の方が一般的だったらしい。この船を庶民は千石船とも呼んだ。米を千石（1俵60kgの米俵で2,500俵）以上も積むことができたからである。『酒田の歴史』には動くスーパーマーケットと書かれていたように（資料館の展示には「商売船」とあった）、北前船はたんなる運送業者ではなかった。先に『北前船寄港地ガイド』の著者として紹介した加藤貞仁には、『海の総合商社 北前船』（無明舎出版、2003年）という著作もあり、それを開くと北前船の全貌がよくわかる。

ところで余談になるが、この加藤は福島出身で私が卒業した福島高校の後輩にあたる。現在は北前船の専門家として著名である。北前船の寄港地・船主集落が日本遺産に登録され、その広がりを紹介するパンフレットを私は由利本荘で手に入れたが、その著者も加藤であった。彼は読売新聞の秋田支社に長らくいたこともあって、東北のことには詳しく、数多くの著作がある。博学多才の人なのであろう。私は、以前の加藤の著作である『ふくしま艶笑譚』（1997年）を読んだことがあるが、若い頃に聞いたことのある方言が満載で、何とも懐かしかった。

鑑屋と『日本永代蔵』のこと

酒田の繁栄ぶりは、今に残る豪商たちの館にこそよく現れている。酒田市資料館を後にして我々が次に向かったのは、国の指定文化財ともなっている旧鑑屋（あぶみや）である。鑑屋は酒田を代表する廻船問屋で、江戸時代を通じて繁栄し、日本海海運に大きな役割を果たしたことで知られており、当然ながら、『酒田の歴史』にも詳しく紹介されている。もともとは姓を池田と言ったようだが、領主の最上義光から鑑屋の屋号を与えられてからは、鑑屋惣左衛門と称するようになったと言う。

また、当主は酒田三十六人衆の一人として町年寄役も務め、町政に参画していた。往時の屋敷は、本町通りから大工町通りにまで至るほど宏大だったようだが、現在公開されているのは、本町通りの居宅地側だけである。またこの家屋は、1845年の大火で被災した後に再建されたものであるという。杉の皮で葺いた屋根の上に石を置いた典型的な町屋造りで、その内部は、通り庭（土間のこと）に面して、10部屋余りの座敷や板の間が並んでいる。

当時の鑑屋の繁栄ぶりは、井原西鶴が1688年に書いた『日本永代蔵』にも紹介されている。もともと当の私は、そもそも『日本永代蔵』を開いたことさえなかったもので、鑑屋を見学するまでそんなことを知るはずもなかった。だが知ってみると、いったいどんなふうで紹介されているのか確かめたくなくなった。いささか物好きの気もあるので、不勉強を埋め合わせるために、角川ソフィア文庫の『日本永代蔵』を購入して確認してみた。巻二に収められた五話のうちの最後に「舟人馬かた鑑屋の庭」のタイトルで鑑屋が登場する。

「北国の雪毎年一丈三尺降らぬといふ事なし。神無月の初めより山道を埋み、人馬の通ひ耐えて明の年の涅槃の頃迄は自からの精進して、塩鯖売の声をも聞かず、茎桶の用意、焚き火を楽み、隣向ひも音信普通になりて、半年は何もせずに明暮煎茶にして送りぬ。諸事のかねがね貯へ置きし故に、渴命に及はざりき。かかる浦山は馬の背ばかりにて荷物をとらば、萬高直にして迷惑すべし、世に船程重実なる物はなし。爰に坂田の町に鑑屋といふ大問屋住みけるが、昔はわずかなる人宿せしに、其身才覚にて近年次第に家栄え、諸国の客を引請け、北の国一番の米の買入れ、惣左衛門といふ名を知らざるはなし。表口三十間裏行六十五間を家蔵に立て続け、台所の有様目を覚ましける。米味噌出入の役人、焚木の請取、肴奉行、料理人、椀家具の部屋を預かり、下賜の捌き、蓑（たばこ）の役、茶の間の役、湯殿役、又は使番の者も極め、商手代、内登手代（家計の支配をする手代）金銀の渡し役、入帳の付手、諸事一人に一役づつ渡して、物の自由を調べける。亭主年中袴を着て少しも腰をのさず、内儀は軽い衣装をして居間を離れず、朝から晩迄笑ひ顔して、中々上方の問屋とは格別、人の機嫌をとり身過を大事に掛けける。座敷数限りもなく、客一人に一間づつ渡しける。」と記されている。酒田はこの頃は

坂田と表記されていたようである。

この文庫の裏表紙には、『日本永代蔵』のキャッチコピーが載っている。それによれば、「本格的貨幣経済時代を迎えた江戸期前期の市井の人々の、金と物欲にまつわる悲喜劇を描く経済小説。舞台は日本全国に及び、商売成功の方法を述べた実用書の面もあわせもつ当時のベストセラー。成功談と失敗談の双方描きながら、金銀万能の世相を活写して、町人生活の諸相をあぶり出す傑作」とある。西鶴によれば、鑑屋の成功の秘訣はまずは本人の才覚であり、次いで一人一役の役割分担の徹底であり、そして笑顔を絶やさぬ応対ぶりだということになる。

鑑屋が『日本永代蔵』に登場することは、あちこちに紹介されているのであるが、西鶴が酒田にまで取材に来たとどこにも書いていない。彼自身は大阪にいて、鑑屋をよく知る人物から聞いた話をもとに書いたのであろう。浮世草子の作者である西鶴は、読み物を書いているのだから、あまりディテールに拘る必要はないのだろう（笑）。要は、鑑屋はその彼が興味を持つほどの繁盛ぶりだったということである。

ところで、この鑑屋には各部屋に扁額が掛けられていた。相当の数である。まったく意味もわからずに眺めていたのだが、そのなかに「穆如清風」と書かれたものがあった。そこでもらったパンフレットによると、書家は日下部鳴鶴という人物で、「穆（ぼく）として清風の如し」と読む。人の気象の和らげることを、清風の和らげるに喩ふと書かれていた。穆という字は、ほんのりと和らぐとか、穏やかでつつしみ深いという意味であるが、年寄りはずべからかくありたいものだとか自戒しつつ、あらためて扁額をじっくりと眺めてきた。鳴鶴 83 歳の時の書だというが、字体もまた清風のような清々しさであった。

午後に米菓工場を見学した後、我々はのんびりと日和山公園を散策した。ここは、酒田の繁栄の歴史を示す多くの遺物が点在する歴史公園として知られている。西廻り航路の開発に多大な功績のあった河村瑞賢の堂々たる立像が建っていたし、その彼が完成させた「瑞賢蔵」と呼ばれた幕府専用の米倉の跡も記念碑として残されていた。この碑は、上から見ると「米」の字がかたどられており、そこからも、酒田の人々の米にかけた思いが伝わってくるようであった。この河村瑞賢は、土木家として幕府の公共事業に携わった人物であるが、人口の急増によって米の需要が増した江戸に、出羽の城米（年貢米のこと）を直送するために、幕府の命によって西廻り航路を開いたのである。酒田の繁栄は、彼の功績なしには語れないということなのだろう。

その他に、寄港する船の航海の安全を祈願して建てられた常夜燈や、かつてこの丘から船頭たちが日和や風の方向を確かめる際に使用したという方角石、明治に入って建てられた木造の六角灯台などもあった。さらには、庄内米を酒田港から江戸に運ぶために活躍した北前船（実物を二分の一に縮尺して再現したもの）が池に浮かんでいたし、文学の散歩道には、冒頭で紹介した芭蕉の句「暑き日を海にいれたり最上川」も碑となっていた。公園の高台から一望した

日本海、台風一過の晴れ渡った蒼空、夏の終わりを告げるかのような柔らかな雲、目に眩しいほどの緑の芝生、それらのすべてに爽やかな旅情を感じた。そして、藤沢周平の『三屋清左衛門残日録』にある「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」といった言葉を思い出していた。

第三部 新潟・新潟湊にて

山形での二日目は、月山ワインで知られるワイナリーや酒田にある米菓工場などの視察が続いた。月山の麓まで来ると、溪谷や吊り橋もあってやはり山峡の地に来たという感じがする。月山は、湯殿山や羽黒山とともに出羽三山のひとつに数えられ、修験者の山岳信仰の山として知られている。だから「霊峰」なのであろう。夕刻までにこの日の調査をすべて終えて、我々は次の目的地である新潟市に向かった。バスは日本海の海岸沿いの道路を新潟までひたすら走ったのだが、途中は民家が点在するだけの風景が続いたので、いささか寂しい地域のようにも感じられた。

北前船の寄港地は、酒田湊の次は新潟湊でありそこまではかなりの距離がある。途中で寄った道の駅も閑散としており、「裏日本」の醸し出す雰囲気が急に身近なものとなって迫ってきた。日本海に沈まんとする夕日が雲間に見え隠れしたが、そんな寂しさを募らせる光景を眺めながら、曇天の夕暮れ時を走った所為もあるのかもしれない。私はと言えば、そろそろ調査旅行も終わりに近付き、旅の疲れが少しばかり感じられたこともあって、車中ではぼんやりと物思いに耽った。

出雲崎と松尾芭蕉のこと

山形では、『おくのほそ道』に触れて稿を起こしたので、ここでもその続きということで芭蕉の道行きをなぞっておこう。「酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望む。遙遙の思ひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く鼠の関を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の国市振の関に到る。この間九日、暑湿の労に神を悩まし、病おこりて事をしるさず」とある。老軀を押しての旅に加えて、「暑湿の労に神を悩まし、病おこりて」という状態であったようだから、芭蕉もかなり苦しかったのであろう。「旅に病んで夢は枯野をかけ巡る」という辞世の句を彷彿とさせるような状況である。

日本海の海岸線との海沿いの丘陵の間にある僅かな平地を、旧北国街道（西では北国街道、東では北陸街道と呼ばれた）は通っていたわけだが、今でも人気のないところなのだから、昔はかなり寂しい街道だったに違いない。北国街道の最北端の地は先の『おくのほそ道』に出て

きた鼠(ねず)の関であり、この関は山形県と新潟県の県境にある。もうひとつの市振の関は、新潟県と富山県の県境にある。この二つの関の間が越後ということになる。この越後で芭蕉が詠んだ句として誰もが知っているのは、「荒海や佐渡に横たふ天の河」である。この句も、当時の芭蕉の心身の状況を知ったうえで鑑賞すると、また違った趣が感じられる。

夜の荒海、金山と流人の悲しい歴史を秘めた佐渡、そして天の川伝説を一つに織りなして、何とも壮大な心象風景を詠んだこの有名な句は、出雲崎で詠まれたとされており、その出雲崎には、芭蕉が宿泊したという旅籠のそばには芭蕉園と呼ばれる庭園が整備され、先の句を刻んだ石碑も建てられている。しかしながら、近年の研究によると、芭蕉が出雲崎に到着した日は大雨であったことや、同行した曾良の書き残したものなどから見て、この句は直江津での作ではないかとも言われているようである。

昨年秋に、私は富山での学会の帰りに出雲崎に二泊したが、狭い街なのでそのぐらいの日数があればおおよそそのところは見ることができる。ここは、江戸時代は天領地であり、佐渡の金銀が荷揚げされたり北前船が寄港したこともあって、かなり栄えた場所だったという。当時の人口は約2万人ほどもあり、人口密度は越後一といわれたほどの土地柄であった。ここにある道の駅は「天領の里」と命名されており、そこに併設されている天領出雲崎時代館は、300年前に賑わった時代を再現したもので、かなり大きな御奉行船をはじめ、代官所、北前船、江戸時代の家並みなどが展示されていた。ここ出雲崎は、妻入りの長屋建築の街並が保存されており、今も当時の面影を残している。また、民衆に広く慕われた良寛が生まれ過ごした土地としても有名であり、立派な良寛記念館も建てられている。ここで私が出雲崎に触れているわけについては、後ほど紹介したい。

小澤家住宅と「裏日本」のこと

新潟市内のホテルに宿泊した我々は、翌日旧小澤家住宅を訪ねた。ここは、江戸時代後期から新潟町で活躍していた商家の小澤家の店舗兼住宅だったところである。旧小澤家住宅は、かつての新潟町における町家の典型的な作りであり、明治時代に成長を遂げた豪商の屋敷構えを構成する一連の施設が、ほぼ当時のまま残されている。小澤家の来歴を記したパンフレットによると、小澤家は江戸時代後期には米穀商を営んでいたようだが、明治の初めに当主は廻船業に乗り出すことになる。以後、運送・倉庫業、回米問屋、地主経営、石油商とさまざまな事業に進出し、新潟を代表する商家の一つになったという。江戸時代から続く数々の商家が衰退していくなかで、小澤家が隆盛を維持することができたのは、常に新しい分野に挑戦して新事業を開拓していったからなのであろう。一攫千金を夢見ながら、小澤家の歴代の当主は旺盛なま

でのフロンティア精神を発揮したらしい。

小澤家の繁栄の背景には、北前船の寄港地としての新潟湊の発展がある。新潟県の主な港は、北から岩船、新潟、出雲崎、柏崎、今町（現在の上越市）そして佐渡は小木となるが、そのうちもっとも取り扱い量が多かったのは新潟湊である。信濃川と阿賀野川の二つの大河の舟運と直結していることによって、魚沼、長岡、越後平野の全域の米にとどまらず、会津藩や米沢藩の米も新潟湊から運び出されていた。諸藩は徴収した年貢米の一部を売って現金化しようとしたため、大坂などのできるだけ高い価格で売れる土地で米を売り捌こうとした。米は湊の近くに建てられた各藩の蔵に保管され、販売は藩が直接行うのではなく「蔵宿（くらやど）」と呼ばれる商人に委託されていたと言う。

米の積み出しで新潟湊が栄えた元禄時代には、諸藩の蔵が新潟町内に 69 棟あり、港から運び出された年貢米は 34 万 4000 俵もあったらしい。また、年貢米とは別に、農村から商人が集めた米が、諸藩の年貢米の総数よりも多い 36 万 5000 俵あり、合計すると 1 年間で 80 万俵もの米が新潟から船で運ばれたという記録もある。当時新潟湊に入って来た船は 40 か国から年間 3500 艘余りもあったと言われている。年間といっても、冬場は海が荒れるのでどの船も港に入って春を待つので、その期間を除けば一日平均で 150 艘近くが入って来ていたことになる。新潟湊の当時の賑わいぶりが窺えるだろう。このようにして、北前船のもたらした各地の湊の繁栄ぶりを知ってみると、日本海側を「裏日本」などと呼ぶのはためらわれる。

今もそしてまた先程も、括弧付きではあれ「裏日本」という表現を使ったが、この言葉には複雑な思いが籠もる。例えば、作家の高田宏は『日本海繁盛記』（岩波新書、1992 年）で書いている。「裏日本というのは、もう光を失った土地への蔑称である。表日本を自称する人びとが日本海側をさして裏日本と言うのは、傲慢で鈍感な言い方だ。無知でもある。北前船の歴史のほんの一部でも知れば、おのれの無知を恥じなければならぬだろう。北前船にかぎらない。日本列島史についての無知である」と。たとえ「ほんの一部」ではあれ、北前船の歴史に触れた私としては、ここまでの指摘にはまったく同感であり、異を挟むつもりもない。

だが、高田は続けて次のように書く。「ただ、私自身は、日本海のそばに育った者として、裏日本という言葉に親しみと誇りがある。日本海側の大半は雪国で、その雪の日々はむしろ裏日本という言葉にふさわしい。表日本は明るすぎる。自然条件の明るさと共に近代化の明るさでうかれている浅薄さがある。裏日本は近代化にとりのこされてきたけれども、そのぶん奥行きは深い」と。私自身は「裏日本」に生まれ育ったわけではないが、東北の福島育ちなので高田の指摘に共鳴するところ大である。「明るさでうかれている浅薄さ」に胡散臭さを感じているからである。陰影を礼賛したい人間なので、ただ明るいだけなのはどうも体質に合わない。

そのうえでなのだが、よくよく考えてみると、「表日本」と呼ばれるところにも表と裏があり、

「裏日本」と呼ばれるところにも表と裏があることにも思い至るのである。北前船の歴史を辿るなかで感じたことは、「裏日本」の表にのみスポットライトが当てられ、日本遺産として称揚されているのではないかという危惧である。「荒海を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」といった表現に、わずかに違和感を感じるのはその所為であろうか。過去の栄華の歴史を掘り起こすだけであったならば、それは「表日本」と「裏日本」を分けた近代化の論理を、同じような形で「裏日本」に適用しただけのようにも思えるのである。相変わらずの臍曲がりな私ではある（笑）。

小澤家を見学した後は自由行動となり、各自で昼食をとることになった。折角新潟に来たのだからということで、同行の何人かと古町通りにある田舎屋に出掛けた。ここは郷土料理の店で、私は鮭わっぱとのっぺい汁を食べた。この店には北大路魯山人の器も展示されていたようなのだが、うっかり見過ごしてしまった。田舎屋も悪くはなかったが、私は古町通りの趣きにも惹かれた。来年 2019 年は新潟開港 150 年ということで、当時の新潟の芸妓の写真などが通りに飾られていたからである。看板をよく読むと、「港まち文化の象徴が、200 年の歴史を誇る古町芸妓です」と書いてある。古町はそういう場所として栄えたのであろう。

新潟大学付属図書館にて

午後からは新潟の米菓工場の見学が予定されていたが、私はここでバスから降り、同行の方々とは別れて新潟大学の図書館に向かうことにした。そこには、私の母の実家にあった夥しい数の国書や漢籍、古文書が、「佐野文庫」と名付けられて収蔵されているので、是非一度直に見てみたいと思っていたからである。母の実家は、新潟県の出雲崎にある西越村の地主であり、その佐野家は、戦後農地改革で没落する前までは、地元でよく知られた家だったらしい。今で言えば、旧家とか素封家などにあたるのであろうか。

叔父が書いた手記には、「祖父の喜平太が尼瀬町で廻船問屋をしていた時代から、西越村中條で 57 歳で亡くなるまでの約 50 年間に買い集めた書物が 27,500 冊あまりあり、祖父はそれを家財蔵に保管して」いたとのくだりがある。集められた書物は、当時佐野家の当主であった叔父の佐野泰蔵が病に倒れたために、蔵書の管理が困難となったこともあって、まとめて新潟大学に寄贈された。あの安保闘争の年 1960 年のことである。それらが、新潟大学付属図書館に貴重な資料として保管されていることは知っていたが（その概要はネットでも詳しく知ることができる）、これまで実物を見たことはなかった。そこで、調査旅行の最終地となった新潟で途中下車させてもらって、図書館に顔を出したというわけである。

一人別れた私は、あいにくの空模様で雨もばらついてきたこともあって、駅までタクシーを

使うことにし、新潟駅から越後線に乗って新潟大学まで向かうつもりでいた。タクシーのなかで運転手と他愛の無い会話を交わしているうちに、安くするから大学までタクシーで行かないかと勧められた。雨も降っているし荷物もあることなので、それでもいいかと思いタクシーで図書館に向かった。図書館では、佐野文庫に縁のある人間がわざわざ訪れたということもあって、大変丁寧に迎えていただいた。

寄贈された資料は、稀覯本として特別に管理された部屋に収蔵されたうえ、一冊一冊の冊子がそれぞれの形状に合わせて作られた布張りのケースに入れられて、きちんと整理されていた。新潟大学の図書館の宝として、私の想像以上に大切に扱われていることがよくわかった。資料の価値などまるでわからない門外漢の私ではあるが、職員の方々の丁寧な説明を伺うことできて、ひとりで心が温もった。佐野喜平太も、そしてまた佐野泰蔵も、以て瞑すべしと言わねばならないだろう。この辺りのことに関しては、自分出版社として立ち上げた「敬徳書院」のホームページに既に記しているのでも、興味のある方はそちらもご覧いただきたい。

ところで、新潟大学の附属図書館のホームページを見ると、佐野文庫解題というタイトルで次のように指摘されている。そのまま紹介しておこう。「佐野文庫は、別名『敬徳書院蔵書』と称し、新潟県三島郡出雲崎町在住の佐野喜平太氏が明治・大正年間に収集した蔵書である。本学附属図書館は、昭和35年喜平太氏の孫である佐野泰蔵氏（元新潟県立新潟高校教諭）から、この蔵書を購入した。総数は和漢の典籍5,237点と地方古文書約2,800点に及ぶ一大コレクションである。佐野家は、江戸時代に佐渡の金山の渡海港・北前船の寄港地として栄えた出雲崎湊を拠点に活躍した廻船問屋であり、屋号を泊屋と称した。のちに地主に転じた。佐野喜平太氏は幕末の慶応2年に出生した。明治20年、22歳で尼瀬石油社設立に関与し、頭取となる。尼瀬石油社が石油算出量の減退のため挫折した後は、政治の道へと転身する。明治33年の立憲政友会新潟支部結成に際して評議員となり、明治34年には町長に選出され、尼瀬町と出雲崎町の合併問題に奔走した。その後、明治36年に県会議員、明治45年には第11回総選挙に当選し、衆議院議員となった。

このような政治・経済活動の傍ら、喜平太氏は学問を好み、法律や漢学の研鑽を積んだ。明治中期から大正初年にかけての約30年間、さまざまな書物を購入している。こうして収集された文庫に、副島種臣が『敬徳書院』と命名したと言われている。佐野文庫に収められた資料を分類すると、国書、漢籍、古文書の3つに大別される。国書部門は、文学・儒学・史学・漢学を中心に多岐にわたっており、名家・学者の旧蔵書など貴重な図書が少なくない。漢籍部門は経部・史部・子部・集部ともまんべんなく収集されており、多くの和刻本に加え、中国明・清時代の刊本や朝鮮の銅活字本も含まれている。古文書部門は佐野家の文書と尼瀬町名主の京屋（野口家）文書から構成されている。

筆者の勝手な推測であるが、尼瀨石油の頭取や地主、さらには町長、県会議員、衆議院議員と政治家の道を歩んだ佐野喜平太は、そうした生き方に飽き足らないところもあって、政治家でもあり文人でもあった副島種臣のような存在に憧れを抱いていたのではあるまいか。その憧れが、おびたしい書物の蒐集に繋がっていったのかもしれない。豪農文化や地主文化という言葉があることからわかるように、当時の資産家には、広い意味での芸術や文化に関心を示した人物が多かったようである。彼らは、蒐集家やパトロンになったりしたのである。佐野喜平太もその端くれだったのであろう。なお、佐野文庫のことについては、中西聡『北前船の近代史』（誠文堂書店、2013年）の巻末に収録されている北前船関係資料案内にも、一言触れられている。

おわりに

取り留めもなく長々と書き散らしてきた拙稿も、そろそろ終わりにしなければなるまい。纏まりのない文章に纏まりを付けるのは至難の業である（笑）。しばらく前にネットで検索して知ったのだが、新潟県議会での質疑において、ある議員が「裏日本という言葉は初めて使用したのは佐野喜平太氏である」と発言していた。まったく初耳だったので、何を根拠にそう言っているのであろうかと気に掛かり、出典を探してみた。あれこれ漁っていたら、古厩忠夫（ふるまや・ただお）著『裏日本—近代日本を問いなおす—』（岩波新書、1997年）に、次のような記述があることがわかった。

そこには、明治28年（1895）の新潟県議会において裏日本論議が交わされたことが紹介されており、「裏日本という言葉を用いたのは佐野議員であった」と書かれていた。佐野議員すなわち佐野喜平太は、こんなふうには語っている。「私は日本海に臨んで良好の港湾の無いのを常に遺憾に思っております。……裏日本に於いて良港の無いと云う事を遺憾に思っている、裏日本が表日本よりも遅れて居ると云うことを遺憾ながら承認して居る一人であります」。ここからもわかるように、既に明治の中葉には、表日本や裏日本といった表現が使われていたのである。

『「裏日本」はいかにつくられたか』（日本経済評論社、1997年）の著者である阿部恒久は次のように述べている。『「裏日本」という言葉が『明治30年代』に一般的に使われるようになった点については同意（千葉説に—筆者注）するが、日露戦争前までは経済的・社会的格差を意味しなかったという点については同意できない。私は『裏日本』の形成期は日露戦争後よりも早く、かつ経済的・社会的格差の観念がすでに内包されていたと考える」とのことであるが、佐野喜平太の県議会での発言は、その正しさを傍証しているようにも思われる。

ところで、裏日本の実相に迫った写真家と言えば、濱谷浩（はまや・ひろし）の名を忘れる

わけにはいかないだろう。東京に生まれた濱谷は、1930年代に都会や下町における市井の風俗を撮影し、新進気鋭の写真家として活躍し始める。しかしながら、仕事で訪れた新潟県の高田市で民俗学者の市川信次と出会ったり、また和辻哲郎の『風土』に感銘を受けたことなどによって、それまで都会的なものに向けられていた視線を、人間とその形成に基底的な作用を及ぼす風土に転じ、そうしたものを記録することの重要性を認識するようになる。

彼は、1940年に新潟県の桑取谷における小正月の民俗行事を撮影するなかで、雪深い越後の庶民の生活と向き合い、人々の自然に対する畏怖と調和の精神を目の当たりにする。その後10年の長きにわたってこの山間の村に通い、写真集『雪国』（1956年）を発表する。さらには、より広範囲に日本列島の気候風土や歴史的な地域社会の成立過程とその現況を確かめるべく、日本海沿岸の厳しい自然のなかで暮らす人々を取材し、その成果は写真集『裏日本』（1957年）として結実する。

『雪国』には、越後に出向いた弱冠25歳の濱谷が、「かつて経験したことのない緊張と刺激」を受け、先の桑取谷において「常民の生活の古典」をみて、「人間が土着し、生産し、生きるということを考えさせられた」と記されている。彼は、「人間の土地、人間の条件」を見きわめようとしたのであろう。また『裏日本』の冒頭には、「人間が人間を理解するために、日本人が日本人を理解するために」という彼の生涯のテーマとなる言葉が記されている。濱谷は、戦時中の1944年には新潟県の高田に移り住んで終戦を迎えている。なお、戦後には、安保闘争の現場を克明に取材し、その記録が『怒りと悲しみの記録』として出版されたことも付け加えておこう。

『雪国』にも『裏日本』にも今では高額な値段が付けられており、そう簡単には入手できない。ただ、2015年に生誕100年を迎えたこともあって、『写真家・濱谷浩』（クレヴィス、2015年）が刊行されており、そこに彼の業績のエッセンスが紹介されている（先の文章は、ここから引用させてもらっている）。『裏日本』に収録された写真でこれぞ濱谷の一枚と言え、富山の白萩で撮影された「田植女」なのではなかろうか。全身泥にまみれ膝まで泥田に浸かりながら働く女の姿である。見るものの居住まいを正させるほどの迫力である。

この女性の顔はすべてカットされている。濱谷があえて顔をカットしたのは、この写真に象徴されるような過酷な労働が、個別の特殊な事例なのではなく、「裏日本」に普遍的に存在することを訴えたかったからなのではあるまいか。「裏日本」の原型とも言うべき労働のありようこそが、「表日本」の「表」（そして「裏日本」の「表」も）を支えていたのであり、今もきっとそうなのであろう。

最後になったが、今回の調査旅行では、最初から最後まで宮寄所長、樋口事務局長を始め社会科学研究所の皆様にはたいへんお世話になった。一言記してお礼を述べておきたい。